



TITLE:

Perspectives on End-of-Life Treatment
among Patients with COPD: A Multicenter,
Cross-sectional Study in Japan(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

Fuseya, Yoshinori

CITATION:

Fuseya, Yoshinori. Perspectives on End-of-Life Treatment among Patients with COPD: A Multicenter, Cross-sectional Study in Japan. 京都大学, 2020, 博士(医学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13327>

RIGHT:

京都大学	博士（ <div>医学</div> ）	氏 名	伏 屋 芳 紀
論文題目	Perspectives on End-of-Life Treatment among Patients with COPD: A Multicenter, Cross-sectional Study in Japan (COPD 患者の終末期治療への意識調査：日本における多施設共同研究)		
(論文内容の要旨)			
<p>慢性閉塞性肺疾患（COPD）は、世界の死因の第 3 位を占める疾患である。患者の多くが高齢で悪性疾患や心血管疾患などの併存症があり、時に重篤な増悪を来すことから、最近のガイドラインでは終末期医療について患者と医師の間で予めコミュニケーションとっておくこと（Advance Care Planning ; ACP）の重要性が強調されており、欧米からは関連する研究の報告も増えている。しかし、日本においては COPD のような非悪性疾患では ACP は実臨床で一般的に行われているプロセスではなく、ACP の状況や患者の終末期医療観についての既報は少ない。そこで、自己記入方式の質問票を用いた多施設横断研究を実施した。</p> <p>京大病院と協力関係のある病院に外来通院中の COPD 患者（60 歳以上かつ喫煙歴 20 pack-year 以上）のうち、（1）閉塞性換気障害が重症、（2）75 歳以上、（3）長期酸素療法中、（4）COPD 増悪入院の既往、（5）身体機能低下または要介護、のいずれか一つ以上の条件に合致した全症例をハイリスク群として登録し、患者と共に主治医も調査を行った。患者用の質問票では、過去の医師患者間の話し合いの状況、COPD の病態についての知識、急変時に侵襲的生命維持治療（人工呼吸管理；MV・心肺蘇生；CPR）を希望するかどうか、終末期医療について医師や家族と話し合いをするつもりがあるかどうか、について質問し、主治医には当該患者との過去・将来の説明・話し合いの状況について質問した。</p> <p>2013 年 10 月から 2015 年 2 月に計 1201 人の COPD 患者がスクリーニングされ、224 人がハイリスク群として登録された。162 人の患者（72.3%）から回答を得て、不適切なデータのために 2 人を除外し 160 人を解析した。患者は、高齢（68.1%）、重症の閉塞性換気障害（56.9%）、在宅酸素療法（20.6%）、虚弱性（15.6%）、増悪入院（13.5%）、のうち一つ以上の基準を満たしていた。COPD の病態についての知識については、慢性進行性であること、がん・心筋梗塞・脳血管障害などの合併症、増悪の危険性、リハビリの重要性など、COPD の進行・悪化についての理解に乏しいことがわかった。半数以上の主治医（54.4%）は、終末期に関する内容について、患者と事前に話し合ったことがあると考えていた。一方、主治医と話し合ったと考えている患者はわずか 19.4%であった。お互いに ACP について話し合ったと思っていたのは 14%であり、コミュニケーションギャップがあった（κスコア= 0.16）。患者の 26.9%は家族と相談したと報告しており、医師との話し合いよりも高い割合であった。侵襲的生命維持治療に対する患者の希望を検討したところ、MV/CPR を希望する患者は 1 割未満であり（MV 6.3%および CPR 9.4%）、MV/CPR を希望しない患者は 2 割弱（MV 18.1%および CPR 15.0%）であった。半数以上の患者が「主治医/家族に任せる」と回答しており（MV 56.3%および CPR 58.8%）、日本人 COPD 患者に特徴的な傾向と考えられた。侵襲的生命維持治療について</p>			

<p>の意思決定の「あり」「なし」で 2 群にわけて解析したところ、COPD の知識が正確だった症例ほど、侵襲的治療に関する自分の意志を持っていることが判明した。また、COPD の知識が正確だった患者群で、将来主治医と終末期医療について話し合いをしたいと考える傾向にあった。</p> <p>今回の調査では、日本人の「ハイリスク」COPD 患者の半数以上は、侵襲的生命維持治療について前もって考えることを避けていることが示唆され、COPD についての知識が不足していることが一因となっていると考えられた。COPD の疾患理解を促すような情報とコミュニケーションの提供が、ACP の実践と終末期医療における意思決定への一助となる可能性があると考えられた。</p> <p>（論文審査の結果の要旨）</p> <p>慢性閉塞性肺疾患（COPD）においてアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の重要性が強調されているが、日本人 COPD 患者における実態については不明である。計 5 施設における外来通院中の COPD 患者 1,201 名中、重症の閉塞性換気障害、75 歳以上、長期酸素療法中、増悪入院の既往、身体機能低下/要介護のいずれかの条件に合致した患者をハイリスク群として登録し、終末期医療観、医師と患者間の話し合いの状況、ACP の実態に関する調査を行った。</p> <p>COPD ハイリスク群 160 人、その主治医 20 人を解析対象とした。54％の患者に対して主治医は患者と事前の話し合い「あり」と回答したが、主治医との話し合い「あり」と回答した患者は 19％に留まった。侵襲的生命維持治療(人工呼吸又は心肺蘇生)を希望する患者は 10%未満、希望しない患者は約 20％であり、約 60％の患者が「主治医/家族に任せる」と回答し、主体的な意思決定率は欧米の報告に比して低く、日本人 COPD 患者に特徴的な傾向と考えられた。さらに同治療を希望する・しないという意思決定状態に関連する因子として、COPD に対する理解が良好であることが抽出された。</p> <p>以上の研究は、アジア圏で施行された「ハイリスク」COPD 患者の終末期医療観に関する包括的な意識調査であり、日本における COPD 患者の ACP の実態の解明に貢献し、今後の診療に寄与するところが多い。</p> <p>したがって、本論文は博士（<div>医学</div>）の学位論文として価値あるものと認める。</p> <p>なお、本学位授与申請者は、令和 2 年 1 月 2 0 日実施の論文内容とそれに関連した研究分野並びに学識確認のための試問を受け、合格と認められたものである。</p>
要旨公開可能日： <div>年</div> <div>月</div> <div>日</div> 以降